

年間第21主日

福音朗読 ルカ 13・22-30

2022.8.21

カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

以前に、前にいた教会ですけども、ある方が、その方はわたしよりずっと年上ですけどすごく穏やかな、そして教会のいろんな活動に参加されてますが、「自分はどうしてもゆるせない人がいるので、『主の祈り』の中で、『わたしたちの罪をおゆるしてください。わたしたちも人をゆるします』っていう一文が出て来ますよね、それを唱えることができないんです」っていうことを打ち明けてくださったんです。お話を聞けば、ほんとにそのゆるせないっていうのは、意地悪されたとかそういうようなレベルじゃなくて、無理もないなあって思う、そういうような出来事です。それに対してわたしはなんと行ったかと言えば、「穏やかなあなたがそこまで言うんだったら仕方がないですよ」とは言わなかったんです。やっぱりこういうときこそ司祭の責任を果たさなきゃいけないなあという思いがありましたので、自分のことは棚に上げて、「だけどイエス様がこのように祈りなさいと教えている、その祈りですから、その通りに唱えてください」と申し上げたわけです。

それは、なぜかと言えば、自分ができるから祈る、できないから祈らないっていうことじゃない。祈りっていうのはそもそもがわたしたちの力を越えたことを神様に託すっていうことです。わたしたち、人をゆるせないっていう思いもある。だけど、考えてみたら、じゃあ「天の御父の御名が聖とされる」っていう、わたしたち人間の側が聖とすることができるのか。あるいは、御国をこの世にもたらすことができるのか。できないですよ。できないけれどそれを祈る。そして、わたしたちは人をゆるせないっていうこともあるし、それは自分の力ではできないけど、でも神様の恵みのうちにいつかそれが実現するということを受け入れて、そして唱えますよね。だから、「その辛い気持ちは分かるんだけど、でもイエス様がそのように唱えなさいとおっしゃったことはその通り唱えてください」、と。ありがたいことに、それを受け入れてくださいました。

考えてみれば、イエス様がこのように言いなさいとおっしゃった「主の祈り」の中で、わたしたちも人をゆるす、ゆるすってことだけが人間の行う行動としてお祈りの

中に出てくることです。その部分を外して、神様との繋がり、イエス様との繋がり、実現するっていうのは無理なんです。でもそれができない。神様の恵みに信頼して、祈りでは自分ができないことも唱えます。わたしたちはいつも「思い、ことば、行い、怠りによってたびたび罪を犯しました」って言いますが、良い行いでも、まずことばだけでも唱えるということが大切かなと思います。そうして、神様の恵みによって、思いや行いはあとからついてくる。皆さんの中にもこの方と同じようなことをされている方がもしかしたら他にもいるかもしれません。あるいはそういう気持ちの方もね。でも、やっぱりことばだけからも始まる。まずは口先の祈りから、やがて神様がそれを用いて導いてくれるんだということに希望を置くということなんじゃないかと思います。

だから、その方にとっては、ある特定の人をゆるせないっていうのが、もしかしたら自分の人生の一番の中心的な関心、それがずっと気になってるから、だからわたしに黙るときゃいいのにわざわざ「こうなんです」って話してくれたんじゃないかとも思います。そのことこそがその方にとっての天の国に入る、あるいは神様と繋がる狭い門だと言っているんじゃないかなと思います。狭い門っていうのは、わたしたちが考えるような、日本だったら特に受験とかで狭き門とか言われるから、ひとつの課題があってそれをクリアした人が入って行く、っていうことよりは、一人ひとりにそのために信仰が与えられているんだという一番大切なポイントというのがあって、それは大概の場合自分にとって一番受け入れたくない、あるいは辛いポイント。だけど、それを外しては神様と繋がっていく妨げになるんだというポイントのことなのではないかと思います。それはどんなことかは、実は自分が一番良く知っていることなんじゃないでしょうか。

イエスの時代のイスラエルの民の人にとっては、特にファリサイ派とか律法学者の人にとっては、一所懸命、自分が救われるために宗教的な自分たちが大切だと思う実践を行っている。だけど、それを行っていない人も神様はお救いになるんだっていうことを受け入れるっていうのが一番できないことですね。だから、それが一番、彼らにとっての狭い門です。今日のお話しだったら、「狭い門から入りなさい」って言って、最後は「西から東からみんなが来て、宴席に着くんだ」って言う。それは広い門じゃないですかと思うけど、だけどその現実を受け入れられない人にとっては狭い門ですよね。それは、その時代の人々のひとつの課題かもしれません。でも、わたしたちはそれぞれ、やっぱりこのことが信仰によって、自分では乗り越えられない、でも課題を持ってるし、気が付いてるんじゃないかなと思います。それを自分の力で乗り越

えたときに神様が受け入れてくれるんだ、神の国に入れるんだ、じゃない。神の憐れみに信頼して、今自分ではできないけど、でも希望を持ち続けて、そして神様のみ旨が自分の中にも実現していくということの希望を保つ。それこそが、救われる、あるいは、救いに至る道と言うんじゃないかなと思います。

だから、皆さんの一人ひとりにとっての狭い門というのは一体どういうことかなって考えてみながら、でも、それを自分一人の力で乗り越えるわけではありません。そして、自分が今できなくても、でも神様のみ旨のうちに実現するんですっていうその希望を新たにしながら、そしてわたしたちと共に歩んでくださるイエス様を今日もご聖体を通して、また祝福を通して、一人ひとりの心の中にお迎えしたいと思います。